

南京

よもやま

歩四七ノⅡ大隊砲 座談會より

岩尾上等兵

敵の首都南京を占る意気込みは大したものでした

私は不幸崑山でマラリアにやられたのですが、疲れ切った身体でありながら戦友達が夜の目も寝ずに看護してくれたのは有難くて泣けました

又病院に送られると皆戦傷患者ばかりでしたが

南京へ行きたい、早く出してくれ、と衛生兵や軍医殿にせがんで傷ついた手を無理に振り廻して見せたり、足を上げて歩調を取ったりして元気の良い所を見せま

すが、その為め夜にはるる熱を出してウンウン唸って居るのです

兎に角大変な意気込みで病院に寝てなど居られませんでした。衛生兵など南京想三十九度など言って笑ってのました

小原少尉

非常な意気込みでした。余り気合が入り過ぎて私等も遂に砲弾がどん／＼来るのに伏せもせず、無理な操作を續けました。その為、沢山の犠牲者を出して申譯なく思つて居ります

安部上等兵など奮戦中に重傷を負つたのですが

「小隊長殿済みません、済みません、安部は負傷しましたし

と悪い事でもしたやうに説教のぶつた、いからしくて涙が出ました

介隊長以下十八名一度に失くした時は

(今後どう戦いしやうか)

と飯も咽喉を通りませんでした

阿部曹長

八里山を占領した時大隊砲も直ぐ山上に引上げましたが弾丸が資によく来ました

私の図案も意趣されませんが不思議と中の御守は少しも疵がありません。二三寸違へば腹を貫通するつらと御守の相護を沁有難く思いました

川上軍曹

南京攻塵の前日軍靴が支給されましたので新しいのと履き代へました。そして受傷した戦友を背負ったのですがさるく上つて閉口しました。何しろ銃がないつて南京攻塵中まごつきました

鈴木軍曹

鹿島上等兵は銃兜を射貫かれ後頭部貫通

で戦死を遂げました。私は直ぐ近くに居た輜重隊に行つて

擔架を貸してくれ

と頼みましたが先方でも足らめと言つて貸してくれませんでした

それで壊れて捨て、ある擔架を拾つて修理して鹿島上等兵と永松伍長の死体を收容しました。その時永松伍長の遺留品を整理しますと物入から手帳が出て来ました。その手帳には實に色々な事が細々と書いてあります。千人針に金を縫い込んであることまで書いてあるのです。永松伍長は戦死をする豫感があつたのではないかと思つてことです

阿部曹長

南京攻塵の時は食はず飲まずで食糧に困りました。占領した次の日だつたか奥を兵隊達がとつて来た。その時は實に美味か

った

鈴木軍曹

あつ眞は支那軍が捨てた手榴弾をクリークに投げ込んで捕つた眞でした

奥平上等兵

眞捕りに行つた時です 向ふに敗残兵が居ると云ふので慌て、射ちましたが、あつちこつちに未だ敗残兵が澤山居ましたから迂廻に出て歩けませんでした

鈴木軍曹

話が前後しますが廣徳で自分達が薪取りに支那民家に行くと 藁の下に裸の死体があります

どうも体格が日本軍人らしいといふので附近の藁をかき除けると果してボロ／＼の上衣が出て来ました

物入れの手帳が第五師團の兵隊であるこ

とが判りましたので 隊で火葬してそれから永の間御世話しました

花小野といふ僧侶の兵隊が朝晩御経を讀んで英霊を慰めておました

小原少尉

五師團と連絡がつくやうになつて原隊に送り届けました 所が非常に喜ばれて鄭重に御禮状と共に當時の様様を知らしてくると云ふ問ひ合せが来りました

岸本軍曹

私はあつ死体を見て日壇隊長殿が單獨行動をすゝなとやかましく言はれり意味が痛切に心得出来たやうな気がしました

十 十 十

愛馬は再び起たす

歩四七ノ八 歩兵少尉野中正己

昭和十二年十二月十日八〇。敵砲弾下を
前進中 集中弾を浴びて馬が墮れ米した
折柄中隊は前進に急なる為めこの馬を殘
して行つたのです

そして八二高地の戦斗に参加して十二日
南京攻略戦も終末を告げ 十三日占領しま
したが分隊の者は馬のことが気になり約一
里半ばかり後方の馬の位置まで行つてみま
した

馬は倒れた儘駈兵の呼ぶ声に頭を僅かに
上げただけで我々の来るのを待つておまし
た

三日間食もなく水もなく疲労困憊その極
に達しながら駈兵の呼ぶ声に頭を擡げたそ
の心情を察し 一同は皆涙を流して何んと

かして助けやうと二時間の間介抱して一里
半の道を南京まで運水て行きませした

これが人間的意志であればお互ひに勵まし
合つても行くのですか 畜生なるが故に傷
の痛みに堪えながら物言はぬ戦士は駈兵の
帰り来るまで待つておたのであります

これまでの幾多の戦斗に於ける功績に對
しても決して死なせてはならぬと色々手段
を盡したのですが 瓜は割れ長途の行軍に
も苦痛にも耐え得ざることを思ひ憐憫の情
に耐えさせませんでした

この時の気持は人と馬でなくして人と人
との情愛を接しておたのであります

南京病院の一夜

歩四七ノ三 歩兵上等兵松吉義胤

十八日の夜二十三聯隊の一准尉殿が自分

の居る一つ向ふの寝おに胸部貫通銃創で横
はつて居ま水ましたが、刻々に臨終が迫つ
てゐるやうに感じられました
もう眼は見えないらしいのです、嚙言の
やうに

中隊長殿 中隊長殿

とかす水た声で呼んで居られます
軍医殿が中隊長殿の代理として優しい声

をかけたかと如何にも満足さうに

大隊長殿は御無事ですか

と言はれました

自分の部下は實に良くやってくれました
と報告され、最後に自分の子供を皆軍人
になるやうにと頼まれました

軍医殿の激励の言葉に微笑みつ、

天皇陛下萬歳

を三唱して従容として遂に護國の神とな
られたのであります

如何にも御立派な臨終でありました 戦

死はもとより覚悟の前とは言ひながら斯く
も泰然自若として死の直前まで軍人らしく
終始された事は永き軍人生活中修養された
精神の賜でありませう

心から感激いたしました

私の脳裡に深く刻み込まれたそして終生
忘れることの出来ない印象であります

谷閣下の

おことづけ

歩四七ノ五 工藤上等兵

南京で遺骨還送者の一員となりまして

二十日の八時過ぎ中村准尉殿の引率で聯隊
本部で申告を済し、未だ時間があるといか
つて遺骨を首に掛けた儘道端に休憩して居
ました

0744

何時の間にか睡気がさして夢心地でうつらうつらして居りますと

指揮者は誰かね

と言ふ声かします

ふとその方を見ますと何んと師團長閣下

びす 皆がづくりして服装を正しました

閣下は紙で修繕した眼鏡をかけた居られ

ましたか

私が皆に重要な言傳をするから必ず傳へ

て呉れ

と言はれて

お前達が内地に帰って貴族の方に逢つた

ら谷が申し譯はないと言ふたと傳へて呉れ

と言はれてハラ／＼と涙を落されました

皆もう胸がつまつて何んとも形容の出来

ない気持になりました

十 十 十

書簡の老母の姿

歩四七三三 歩兵少尉 菊北 清

昭和十二年十二月十二日午後零時二十分

一徳同邦待望の日章旗は 我が三明隊勇士

の手に依つて南京城壁の一角に打樹てられ

ました

かくして敵首都南京は完全に皇軍の手中

に帰し 銃後國民の熱誠溢る、聲援と期待

に答へたのであります

この喜びと感激の未だ消えやらぬ或る日

の事でありました

私の手元に届けられた手紙の中に

某に是非渡して下さい

と一枚の新聞の切抜きが同封してあります

す

一番に目につくものは某の母親であります

せう 年老いたお婆様が藁葺きの家を背を

に如何にも嬉しさにニコニコと燃つて居
ます

其の手には息子から来た南京響の一番乗
りの手紙を押し戴くやうにして持つて居り
ます

凡て記者の指図に従つたものでせう

記事は南京響の一番乗り某君その日の奮
戦が事細かに書いてあります

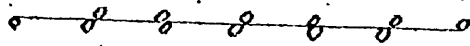
お母様喜んで下さい お蔭で一番乗りが
出来ました

といふ某君の飾らぬ手紙卒直な文句がそ
の儘掲載してあります

更に又此の寺報に喜ぶ老母の心情が髣髴
として紙上に現れておます

息子出かした よくやつた これで村に
も肩身が廣い 氏神様に御百度踏んだ甲
斐があつた

と泣いて喜ぶお親の尊い姿が目に見える
やうです



私は人事ではないやうな気がして何回も
何回も讀み返しました

百孝この一事にあり 某君の爲めに心か
ら喜び城壁上の感激を今又再び味ふやうな
感激にひたりました

△勝つと呼び勝つと別れし故郷の

は、の心を今はしのばる

嘸 安東曹長

。南京戦の華と散りし安東
曹長の母校より寄せらる

一 東洋平和の夢破れ

正義の利劍鞘走り

待望の日は遂に來ぬ

盡忠國に報ひんと

歡呼の嵐に今ぞ出ず

焔と燃ゆる大和魂

二濁流ひたる永定河

鉄壁ほこる保定城

或は渡り又降り

長谷川部隊の丈夫が

不意を襲ひて朝霧の

抗州湾へぞ上りけり

三遠かに太湖を迂回して

勇猛神技我部隊

双向小敵を兼退し

早くも迫る敵軍の

首都南京の防陣地

堅壁ほこる中華門

四五十尺余の城壁や

銃眼火を吐くトリチカに

備へは堅し門構へ

敵軍最後の抵抗に

射出す弾は雨霰

鬼神たりとも近寄れず

五此の時出で、突進路

開けと命を受けたるは

三明部隊のその中に

勇敢無比とうたはれし

安東曹長を長とする

決死の兵六勇士

六いざ此の時と六勇士

弾丸雨と降る中を

大地をけつて突進し

忽ち梯子立てかけて

猿の如く登り行く

見上げて高き中華門

七、それをうち見て敵兵は

我をめぐけて雨の如

弾丸や、ぞ無念にも

既に一人は倒れたり

まれど怯まず五勇士は

あ、神技か登り行く

八登りつくせば敵兵を

僅か一つの機関にて

力の限り射ちまくり

弾丸盡きては手榴弾

石ころ投じ應戦す

兵どもの雄々しさよ

九折しも敵弾とび来り

安東曹長負けは

君は最後の雄叫びに

日の丸の旗しかと立て

萬の一字を此の世にと

残して莞爾と瞑しけり

十時は師走の十二日

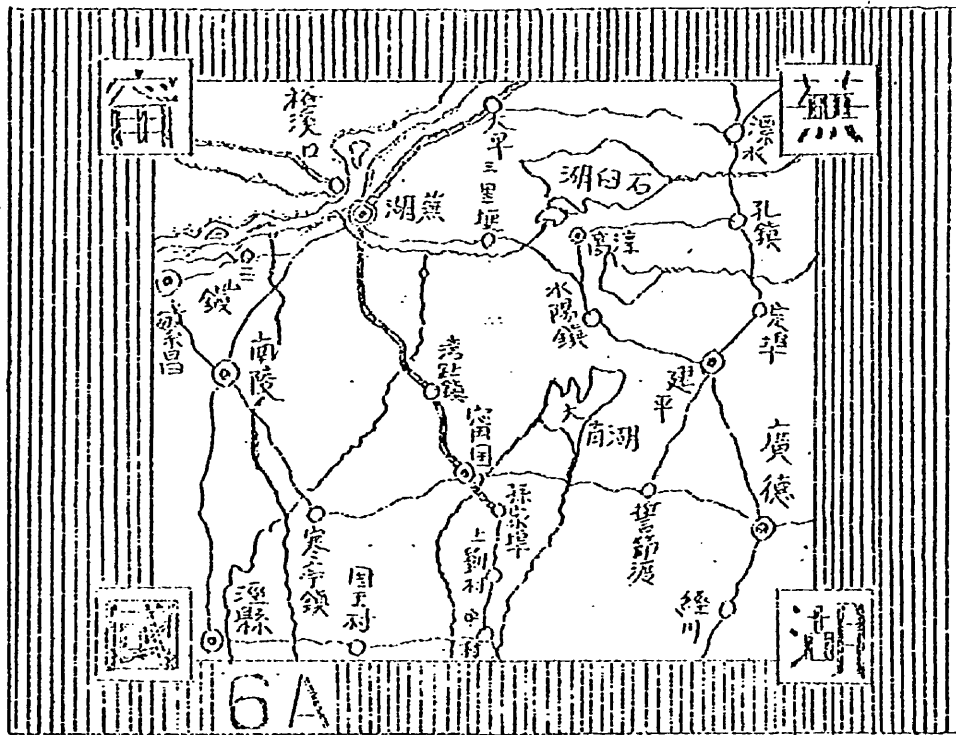
聖戦こゝに六ヶ月

あ、待望の都入り

安東曹長遂になす

見よ城門の空高く

風にひらめく日章旗



目次	
1 驢馬に手をやく	一 砲上 財部実廣
2 家内國 敵機の襲撃	一 砲兵村 熊野御堂藤
3 湾趾鎮 家内國の廢路 敵大軍に襲撃する	一 砲 箱上 野尻健由力
4 建平 討伐 可笑い思ひ出	一 砲軍 福井盛春
5 團山鎮の討伐	四 砲軍 伊東日升
6 孫家埜附近の戦斗 防禦は御免	五 砲兵尉 志垣勉藏
7 砲身が裂けよと悪まくる	五 砲曹 内西佐吉
8 母を呼びつゝ	四 砲軍 田村日出男

南京から蕪湖へ

驢馬に手をやく

野砲六二三 砲兵上等兵 財部実廣

南京攻略後間もなく 我が第十ニ中隊は蕪湖附近の警備を命ぜられまして 十二日ニ十一日午前八時 蕪湖に向つて進軍しました

内倉分隊長殿が「驢馬を曳いて行け」との事で 米一俵積んで砲車の後に跟きました 午前中は驢馬も元氣よく歩きましたが 午後になると選れ勝ちです 戦友が尻を叩いてもマンマンデーです そこで私が代つて木の枝で耳を叩きました 耳を叩水ると痛いものですから トコトコ走って砲車に追付きますが 五十米も行く

と又選れるので又叩く こうして繰返してある中に積んである米がとうとう傾いてしまひました

道路脇に避けて綱を締め直そうとしてあるうちに 部隊は三三百米も前進してあります 熊野小隊長殿が乗馬で駆け戻つて来られ

「何をぐずぐずしてゐるのか」

と言はれます 三人は高一生懸命になつて綱を解かうとしますが なかなか解けませぬ 遂に綱を切断すると 小隊長殿が

「お前進が背負つて行け」

と云はれますので 私は池田上等兵と半俵づつに分けて背負ひ中隊に退反です

米を背負つてゐる上に銃も装具もあるので一里位も行くと汗が泉の様に流れ出る 息も苦しくなりました

私共の此の姿を見た戦友が「こんな寒いのに汗が出るなんて結構な

ものだ
と言ひますが 私共は結構所の騒ぎはあり
ませんでした

甯國警備と

敵機の襲撃

野砲六二三

砲兵中尉 熊野御堂龍馬

昭和十三年一月、南京南方山中の要衝甯國
警備中のことぞす

目まぐるしい北支の機動戦に引続き、江南
に松戦以来約半歳振り、初めてべに幾らか
の余裕を見出す事の出来た此の地の警備で
あります
誰の心にもほつとして、数日遅れて祝つた

大陸最初の元日も終て、これから徐に命の
洗濯でもやろうかと思つてゐる正月の初旬
——たしか十一月だつたと思ひます

それまでに時折見馴れた友軍の偵察機は

この孤城の上を飛ぶことはありましたが

その日は珍らしくも十機に近い爆撃機が銀

翼も勇ましく城の上空を逸かに訪れました

南京戦以来に見る友軍機の稀疎です

さなきだに外部との連絡の少いこの山間の

警備兵としては、一し目力強く感激の目と

見張つて、空の島王を見送つたものです

そして地上の勇士の歡送を後にして、機守

も爆音も一應消へ去つた後、再びその勇士

を我が上空に現しました

一度飛び去つて再び引返して来た友軍機と

信じ切つてゐる我々には、殊更眼鏡で識別

しきれればならぬ程、過るに於ても苦い経

験はありませんでした

機は悲々地上の歡呼に應へる如く、ニニ回
我が上陸を旋回しました

そしていつの間にか、水も懐しさの余り眼
鏡を取り出し、笑々へ浮べ、機を凝視して
ぬた一士官の口から

「あ、通信筒を落した」

言ひも終らぬ中に、天地も裂け地網を揺が
すばかりの大音響とレオノクも身近に感ず
ると共に、城壁を越え、東方の空中に濛々
たる土煙が一面にハク／＼と上るのを見ま
した

「さあ、今迄の花園が一瞬にして修羅場と化
した、歡迎の初やかを瞳は、憎悪と恐怖の
複雑な色に変つてしまつた
敵にしてやられるのです

舎内に入つて銃を持出し、それを擬した時
は、既に城の上を一旋回の上、悲々と板首を
帰路の方向に向いた時でした

初めて、はなかつたが、落付いた改修機関の
塔は、特に印象深く、我々の頭を占めてしま
ひました

そうして次の日から先づ敵無小銃を以て上
に對抗すべく、悲壯な計畫を樹てました
効果は思つた程もなく、其の後性懲りもな
い襲撃に、対策は一歩進めて

「敵機相手とせず」

と決まりました

それから、甲隊全員を收容し得、然も命中
弾を蒙つても大丈夫といふ防空壕の構築に
着手しました

それは丁度、太古エゲプトのピラミッドを
数万人の人間の労力のみによつて造り上げた
と同じ様に、兵隊の呻くやうな掛声は夜を
日に継いで数日間続いて、遂に敵機黙殺主
義の実行に取りかかりつたのであります
しかしその後、敵影も全く等も消してしま

ひました

灣趾鎮より甯國への歸途

敵大軍に襲撃を受ける

野碓六三配属輜上野尻健男

昭和十三年一月二十二日 灣趾鎮より甯國
に歸る途中の出来事です

大行李六十車輜に援護歩兵一個小隊——
僅かの兵力に稍々バ細さを感じつゝ行軍の
途に就きました 雪あがりの天候もどうや
ら回復して 晴れたり曇つたりのよき行軍
日知でありました 道路もいくらか乾いて
来ましたが 山陰にはまだ残雪が白く残つ
ております

晝の天休止に焚火を圍んで食事をしておま
すと トラツクが二台甯國の方へ行きまし
た

午後の行軍に移つて一里も行かぬうちに
先程のトエツクが引返して来ましたので、
さては敵襲をうけたに相違ない」と考へな
がら暫く前進すると案の定 前方の橋から
煙が立昇つておます 橋を焼失して甚悪し
やうと企たものらしい 馭兵は馬を持ち合
つて應急修理にとりかかり 歩兵は警戒に
就きました

漸く一つの橋を渡りますと前方トニツミツ
と悉く橋を焼いてあります 是等り難関を
無事に通過し終るや 突如 右側すの丘の
松林から一斉射撃をうけましたので 三百
米程前方にある三尺ばかりの崖下に遠敵し
て 片唾をのんで歩兵の交戦を見詰ておま
した

馭共にも銃があつたらとど程残念に
思つたかされません 弾丸は間断なくシュー
シューと耳を掠める この時大行李長の馬
と轡馬が斃れましたが 牛蒡剣一つしか持
つての旨い私共は馬の塚さへ掘ること出
来ず 轡具を脱して空軍の後方に括りつけ
て行軍しました
暫くすると右後方の部落から敵の増援隊が
現はれよしたので 友軍は益々不利となり
ました
そこで突進路を開いて小高い丘を歩兵十數
名(自動車に復乗してのた歩一三、無電隊)で乗取
り勇取に戦つて最後まで死守しました
此の丘山の戦斗は実に華々しく 弾丸ほと
うに射ち盡し 肉弾戦をみるにつけ 私共
も行つて加勢したいバで胸は一杯でした
が 韃靼兵の私共は馬を置き去りにしては
行けませんでした

何時までも此処に居るわけに行かず 一歩
でも密着に近寄りねばと 前進すると道路
一面に土を盛り上げて 地雷火を敷設して
あるので前進不能です
万策つきて右の野原の方へ迂回して 弾丸
雨霰の如く飛来する中を 馬と共に早馳です
野原の下り口から田圃を横断して道路上に
出たのであります 田圃の横断は敵陣地
から丁度見下しになつて 弾丸の来ること
話にならず 田圃への下り口に二車轡いつ
くりかへしよしたが 馭共もさるもの 弾
丸のペン／＼来る中で人手も借らず起し
て居ます
道路上に出て部落の燒跡まで走つて行きま
した 當時僅かしかないと思つた道程が
後になつてみると三千米もありました 私
共は馬を安全地帯に移すことのみ考へて
夢中で走りました

此の危機地帯突破に戦友二名負傷しました
が、衛生兵も居らず、応急処置を施したのみ
でした。

「まだ前方には敵が居る。なか／＼勇敢で
喇叭をふいて突進して来なさい。」

との報せに、決戦しやうと度胸を握へて
帯剣を抜いで待機しました。

此の時通信隊二名の決死的努力で、有線電
話による空国との連絡がとれ

「一ツ大隊の救援隊がたつた。今突進した
と。侍へられ一同志気旺盛になりました。」

数時間に亘る戦斗に小銃弾は盡ち盡して、今
は擲弾筒が唯一の頼みです。

「擲弾筒後方へ」

「前へ」

と走り廻り、ドカン／＼と砲声天地に轟

き渡り、午後六時頃、救援隊が到着しました。
大隊砲重機銃後の総攻撃に敵は一たまりも

なく逃走して行く

友軍は直ちに追撃に移りました。

八時十九時と、時は過ぎても歩兵は歸つて

来ません。馱兵は馬の番をしておるのです

が、夜が更けると共に突進は増々果敢ります

十時頃歩兵が引揚げて来ましたが、車輛

の前後に援護隊を配置して、十一時過ぎ空

城内に入りました

歩兵はこの寒夜に拘らず、全員然火を迎

に出て居ました。私は生きて戦友に会へる

嬉しさに涙ぐんでおりました。

力	兵	友軍	敵
補助兵 二〇	野砲六輪 五〇	戦死 四	戦死 四
車輜援隊 五〇	歩兵 二〇	戦傷 一四	戦傷 一四
自動車連隊 三	余 十	果 四	果 四
		戦傷 五	戦傷 五
		約 四	約 四
		遺 一	遺 一

建平 討伐 可笑しい相出

野籠六三 砲兵軍曹 福井盛春

第十ニ中隊は歩兵。隊長指揮にて 建平
附近の大討伐に行きました

十字舖に敵列を殺いて 敗退し来る敵を今
か今かと待つうちに 曇り勝ち天候は十時
頃から雨になりました

中隊では敵散搜索兵として 觀測手一名
通信手二名を陣地に残して昨夜の宿舎に雨
宿りすることになりました

激しい雨に雨漏りしながら家は一軒もありま
せん。夕食の頃から益々降り募ります

日直下士官が「明日は前進」との報告で出
発準備を終へ 床につきましたが雨漏りの
寒さは身に沁みます

兵隊達は毛布の上で藁を寝て 宿舎の真中
に焚火を多量して寒さを凌ぎました
フト目をさますと五時——出発迄後三十分
しかありません 中隊長殿が来られて

「皆起きろ 出撃だぞ」

と言はれつゝ 焚火の傍の藁束に腰を下さ
水もした すると「ウソ」と奇声をあげて
中隊長殿の足を掴んで飛起きた者がありま
す 中隊長殿は勿論 傍らに居た私共も吃
驚しましたが 一分隊の〇〇上等兵でした
上等兵は 昨夜庭当番でしたが余り寒かつ
たので 藁をかむつて焚火の傍りに寝てお
たのです

それとしたりす中隊長殿は 一度長い腰掛と
はがりに腰を下されたので、いゝ気持ちで眠
つてぬに上等兵が 奇声をあげたのです
今でも中隊の笑話となつてゐます

揚子江岸

チヤンバラ物語

野砲六ノ二

砲兵中尉 善波 周

これはまた余りにも阿呆らしい一場の子
ヤンバラ物語であります
時は昭和十三年一月三日 場所は南京を去
る南十里 國立公園を以て有名な彩石鎮の
揚子江岸の芦原 片や中國に其の名も高い
新選組になぞらふ大刀隊 片やこれは又白
兵戦などは、最も縁の遠い野砲隊とつた
でいります
南京が陥ちて支那で迎へる最初の正月、そ
の頃はまた酒も豊富でした 餅は搗く

門松は立てる 牛や豚はくさる程ある
正月酒に浮かれたわけではないが
一寸足を延した對岸の島へ何とそは
周囲五里もある島でしたへ 中隊の
下士官兵が十名ばかり偵察に出かけた
までは良いのですが どこでどうまじ
れたのか 其の中の二名が夜になつて
も帰つて来ません
さあ大騒動です
中隊長以下江岸に出て かがり火を焚
くやう 四方に走るやう 一夜まんじ
りともせずとうとう岸辺に夜を明けし
ました
ほの／＼と明初めた朝霧の中を やつ
と探し出した一艘の小舟に 當時小隊
長だった自分以下二十名 怪しげな艦
の音も氣せはじく 濁流滔々たる揚子
江に乗出ました

ちよつと見るとすぐそこには見えぬが 流石
は揚子江 島につく迄はつぱり三十分はか
かる だん／＼近づいて行くと 岸から六
七百米向うには丈余の芦がずつと連り そ
こ迄は緩い傾斜の泥の岸 もう一息で岸に
着くといふ所で 突然芦の切れ目から軍艦
旗の標有赤い旗二旗を先頭に 隊伍堂々と
川辺に向つて進んで来ます
青黒い服装の二列縦隊の一團 あ、昨日公
園に遊びに来て居た海軍の連中だぞと思
つて居る中に めい／＼肩に擔いでゐるも
のが朝日に映えてピリ／＼光る
こりや少し妻だわいと思ふ間もなく
岸辺で眼鏡片手に監視中の中隊長一行が
突然軽機で射ち出した
敵だ さう秀へついたが 余り堂々と
進んで来るので まだ
海軍だ

なんて言つてゐる者もあります
いや敵だ 青龍刀を持ってゐる 油断す
るな
と叫ぶと同時に 彼等は軽機の音で 出
いか 出まいかとすゝ襟に見えたが結局か
く水でしまひました
よし 二人の兵隊をやつ、けたのは奴等
だな 動揺したのを見ると大したものでは
ない やつ、けたら、といふので自分は早
速下船展開を命じました
何しろ舟着き場はなし ドロ／＼の岸のし
ころなので 皆半分は水の中に飛び込み
中には舟が揺れて川の中にふつくりかへる
者や 足をすべりして戻もろ着く者もあま
す それでも大急ぎで舟には三四名の監視
を残して全部上陸 正に芦の生えてゐる土
手に向つて散開を終わらんとした時 突如
四五十米距れた 左前方の芦の蔭から 釣

四五十名の大刃隊の一團が、鉢巻たすき袴も物薄く、夫々四五尺もありふといろ薙刀、秋の大青龍刀を、大上段に振りかぶつて、
「ワア／＼」と喊声をあげたり、飛出し

て来たのには驚きました。余にも突差の幸ではあり、こちらには展用の側面を衝かれた形になり、おまけに距離は近く、それに白兵戦といふ赤株を完全にとられた形なので、こいつはじまつたかと思ひました。

然小隊長といふものは、敵を見たら何でも真先にとび込ぶものだと思ひ込んでみたので、すぐさま三尺の秋水をぐらりと引抜

いて
「突込めーッ」

と叫びざま、敵の先頭目がけて走り出しました。走り下り兵の方を見ると、余にも不意を打たれてか、流石に夕夕／＼したる

しく、續いてとんで来り者がな、首が刀を高く擧げて

「突殺せーッ」

と叫んだ時には、も敵は目の前に来ました。敵の御大と見え、奴は、まだ若造下り獐

猛な面構へ、奴で、頭髪は延ばし、その

鉢巻で、いぼり、青龍刀を振りかぶつて、一

氣に自分目がけて突進して来りました。自分

は將校の外套を着てあつたので、良き敵

と思つてか、三四人一度にとぶか、つて来

る。相打りになつては向うの得物が長くて

重いから損だ、一度打たせてからと、走り

下り、青眼に構へた、と、同髪を入れずヤツ

と切込んで来り、自分は學生時代明治神宮

の第一回剣道大會にも代表が出たことあり

るし、他、稱四段といふので、此か自信もあり

とつぎに其の思ひの判断はついたが、さて

その水を受流して、エイ、とばかり切り込ん

だはい、が
「しまった、短い」 確かに手應へはあつたが、相手を少し切下げただけで、何しろ十年近く竹刀から遠ざかつては、冬の外套は着てゐる。足場はこつちに傾斜してゐて、泥で長靴は二三寸入り込んでゐる。第一踏み込みも何も利がない。おまけに相手を五尺の大物と来てゐる。で、同合しくそも存い。しまった。と思つた。片は敵の二尺大刀が来た。青龍刀にも剣法といふものがあるらしく、敵から相違なものでした。
それをつきと受止めた。ほよいが、軍刀の改装が危介でなかつたので、受けた意味で柄込みの所からボキーンと二ツに折れてしまふました。そのはずみで右肩のところに、クンと一太刀浴びてしまひました。
いや、いや、それからは折れたのを片手に持

つて、すうたもんだの大キヤンバウ。三四人一緒に切り込んできて来るのだから、忙がしい。事おびた。泥に足を止らぬで、轉んでみたり。剣道の達人もさうばり、おまけ手が出ない。この頃やつと勇氣を取戻した兵衛が、大危しとみて駆けつけ、一人の下士官が横から敵の胴を、ほう目かけて切りつけた。まではない、が、刀を吹とばされて、他り者が、それを取って又打ちかゝるやうに、誠にとり、映画にもない大乱斗。奇りば切ると言つても、目茶苦茶に切り込んで来た。だから始末が悪い。ヒリ／＼光る道場の板の間で、ヤア／＼ボーンと言ふ聲には、参らぬ。それでもとう／＼十人を殲じ、後々奴は皆逃けてしまひました。
こつちは自分が一太刀やられたまきりで、他は不思議にも誰一人微傷だも受けませんでした。

團山鎮の討伐

野砲六回砲兵軍曹 伊東日升

四月も終り頃になると暖い

休養日のことゝて快晴を幸ひに中食をすま

せると 兵隊の大半は 嬉々として夫々の

目的に向つて外出しました 後に残つた者

も 讀書や雑談に或はゴロ寝と一週間の

戦斗と勤務の疲れを休めておました

所が突然「非常召集」の聲に楽しい夢を破

られて「スハ 録音機」とばかり 階級も

折れんぐらゐの勢で倉前に飛出しました

聞けば雷国並北方約七料の地点に歩兵第四

十五聯隊の一ヶ小隊が整備する團山鎮とい

ふ所があります そこで敵軍約二千が攻

撃に来つたとの事です

直ちに中隊は之が討伐の目的を以て

歩兵第一大隊ニ配属 團山鎮ニ向ツテ出

発スベシ

との命令です

出発準備—— 然し兵隊は生憎外出し

て居りません

「直ぐ外出先の者を採して来い」

傳令は八方に飛びました ものゝ三丁分と

経たない中に大半は集合を終り 急いで四

門編成が出来上りました

釋手百舞の中に出発準備完了—— 出発し

途甲急行軍の中へ 團山鎮を去る約一料の

地点に到着 是より小休止しました

一山越して向ふには銃聲がしきりにし

今や彼我の激戦中です

×時×分 團山鎮南を數百米高地に陣地進

入—— 敵の大軍は三ヶ包圍隊を以て

攻撃し來つております 多勢を頼みに仲々頑

0760

305

強す

蕪湖道路西側高地(討伐の領後下す嶺出た高地)に據る敵に向つて猛烈たる砲撃(砲距離三千)は開始されました

敵挺の子エゴもあきらしい敵は、新子も加へてなかく退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

退却しどうもありません

るんちやないぞ

この注意に、兵隊はお互に顔を見合せ快にの笑を浮かべておりました

我が砲兵の進退を知つてか、敵は以前にも増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

増して我に十撃火を浴せよす

を切ります
敵陣は小脚の岩とパツと穿ち、足下で
白石を割り砂煙を上げる。チエッコ機銃の音
が耳近くで花火を鳴らす如く、パチン／＼と
聞えます
見るとはなした大茶に目をやると、笹架屋
の箇鉄が外れを匪が半分程振りかきつてお
ます。敵陣下の此の場合、殆ど漸もありま
せん。ハワと思ふ間もなく、遂に落ちつし
まひました
人馬漸く遠敵し得る隘路に進入直ち、左列
布置。人も馬もあの猛烈な敵陣雨下に
在つて無事らしい。最前より猛射轟しくお
る敵もはたと小林外になりました
只我々の側方に於て、私共を援護する中隊
陣地よりの榴散弾が、パン／＼と曳火して
敵を脅かしてゐるのみです
みまると前方約三百米、道路右側の高地の岩

陰を、敵兵が石を投擲して退却中です
「表大目標よし、目標は前面を退却中の敵
歩兵、直接砲腔より狙撃する。榴散弾
着弾、銃口を、お、連続各個に射て」
小隊長殿の命令、下第一弾は放たれた
ザッ／＼と
よし、命中し
逃り行く敵が真中に弾着せました
私共の進距高射撃で驚かすか、あれ
程頑強に抵抗してゐた敵も、漸く退却の色
をみせて来ました
歩兵第一線より私共を援護の爲、軽機一分
隊來着致しました。敵を眼前に控へて砲一
門、小銃二三挺し、持つてゐない私共は
此の援護に感謝感激して振舞つた
觀測所より魚せききつる彈雨下を、入隊回軍、
曹が走つて来ました

車長高橋上等兵が前進中、心配してぬた砲架匠を、敵の弾雨下に身をさらり出して、私達の射撃間、つの間にか持つて来ぬおました。

太陽は西に傾き、夕暮も早や迫り、我が分隊は一同無事、大成功裡に飛馬逐歩にて本陣地への帰路に就きました。帰途、未だ残る敵残肉銃の猛射をうけましたが、逃げ腰の敵弾があたり、岩もよく、頭上高く飛ぶ岩を砕くばかりでした。一同無事歓声の中に本陣陣地に再び帰るとか出来ました。

孫家埜附近の戦闘

野砲六、五、砲兵大隊志垣勲藏

防禦は御免だ。

丙「では今日は攻事と防禦とどちらが辛いかと云ふことをお話願います。どういふ場合に御逢いになった事がありますか？」

甲「一隊にどちらが辛いといふわけにはありません。せうが、私は砲兵として、防禦の場合に遭遇したことがありません。勿論防禦の意味も色々ありますが、部隊全般が某地の警備に服するとすると、その周囲はいつも敵に包圍されて大まかに防禦態勢にならざるべからず、これは兵が辛いので大して辛いと思ふ事もありません。」

丙「防禦兵力はどの位だつたらうでせうか、又地形等は？」
甲「歩兵大隊本部と二中隊半、機関銃の主力、それに私の方が中隊主力二隊、段列をといふ以上、比較的そう辛い兵力では」

ありませんでした。何しろ部落が広い孫家集と云いますが、宣威縣甯固の南約十二軒、無城壁で西は諸所渡渉容易な河川を以て部落の境界とし、東南北は田畑、疏きで障りとなるものなく、中は東西広の所で三百米、南北約千五百米に迫り細長い部落で、割合に家屋稠密で、各領前には立派な街だった事が想像されました。丙「では配備等は火船で防禦戦手の布詰をどうぞ」

甲「敵は五月一日を期して全般的に攻勢する情報は、早くより我軍に入乎承知して居た處で、豫め所専の準備に遺憾なき如く手配中、案の如く四月二十九日頃より敵の行動は澄となり、弁候の出没射撃回数も漸次頻繁となり、四月三十日一七〇〇頃突如南方より小銃の射撃をうり、部落の南端に多数射撃落下し始め、物凄く景況

を呈しました。我に損害は少しもありませんでした。私達はどの所在窺見に大いに努めました。が、どうしても発見することは出来ませんでした。その甲に西方河向の部落より小銃の射撃をうり始めました。その際、夜に入りニミミロ頃、東北方に敵の信号弾の上を見つゝ、丁度五月一日の三〇〇一す前になり、昨日の位置より敵山砲り集中射撃開始と共に、東南の三方より迫る銃小銃の射撃開始。その職なること初共名狀の仕様もありました。昨日の午後、來の彈高息まぬ中に何時の間にかこんな大軍が四方に押し寄せたかと思はれる程の物凄さでした。然し味方は満を持して攻まず、敵の照準も不正確で、何等損害もなき内に遂に天明となりました。天明歩兵大隊本

部は部落中央東端に在りまししが、道路を備つて来た敵襲部隊は夜暗を利用し鉄條網に板を渡して乗り超へ只一軒あつた藁屋に放火しましたので、その明に見へた状況は壯絶と云ふか勇壯と云ふか敵味方入り乱れで手榴弾を渡つてあつる甲に、抜刀銃剣にて渡り合ふ者あり敵を鉄條網の線に追ひ掛けた後、藁屋に水溜らさ切り落すもの、芋の子刺した銃剣の餌としてゐる者、中に敵の勇敢なものも本部室内に四五名乱入逐に籠られたものもありましたが、夜が明りましても逃げ遅れた一部は、三四十米高れた破壊家屋の壁の隙から手榴弾を投げたりする者もあり、ニ、三百米退却した本部の敵は、水こそ、ひつきりなした後方部隊と交代を繰返し、小銃迫撃砲山砲の乱射乱轟に一日も暮れまじに

此の間我々砲兵も遠くに、逆くに詳し寄する敵を従へて快心の射撃効果も収められたが、荷しろ砲は二門、射撃方向は東西南北の予備陣地に入れる、又某一門は位置変換する等忙しい危険な、全く薄雨の中での動作でしたが、損害も皆無で幸でした、大隊本部前の遺棄死体のみでも約四十を算し申々壯烈な戦斗でした、丙「それまで戦斗は終りましたか」甲「いや、一日日中と晩から二日にかけて又々一歩も退かぬ敵の包圍攻撃でよくもあんなに弾丸を持つて来たものだと思ふ程大砲も小銃もよく射りました、然し割合に高い弾丸で、部落を越して敵のお互の頭の上あたりに落ちたんがやむいかと思ひましたが稀に家の壁にあたりた弾丸の音の物凄いなこと——」神経も大分イラ／＼しますし、もう愈々

此の世の終りかと思つたりしたことも何
度もありました」

丙「何か戦の中で印象に残つたことはあり
ませんか」

甲「ありましたニ度程 面白い部に属する
事ですが 一つは敵が始終使ふ信号彈の
攻撃退却時の種類が判りましたので 之
を利用して部隊間進退來てみた敵に一杯
食はせて追拂つたこと

一つは二日の拂曉 とも間近進來て居た
敵に對し こちらで突來うッパを吹いて
一同が大喊聲を擧げて氣勢を示しました
ら 第一線の銃聲がハクと熄んで 暫く
すると第二線へ多分督戦隊(ト)から激
な銃聲が起り 味方打ちを初めたことで
した 上は第二線が 第一線の後退を曰
本軍が突進に移つたと誤認した結果でと
思ひますが それきりニ度と前進攻撃を

して來ませんでした 此の二つは敵が逆
手に引掛つて一杯食はされた面白い事だ
す」

甲「續て三日には北方から段々増援隊も進
まり こちらでも突來して敵を遠く追拂い
四日には増援隊と手を握つて 東方より
南方にかけて大々的の突進をなし 全く
敵の企圖を挫折しました 十数度敵も逆
襲して來ましたが 野戦ではお茶の子芥
子で何の苦もなくやつつけてしまひ
ました」

此の戦斗を通じて痛切に感じたことは
防禦は敵が何時 如何なる處より來るか
どこに重点が來るか等 全く判断が出來
ないのが對応の処置に非常なる決バ 肉
体の疲労を感じることも 部隊内では砲の
使用に非常に制限をうけ 多数の予備陣
地を有し 彈薬を整備し射界の清掃 掩

0766

蓋の構築 工事の増強等万全を期せざる
ては不可なりといふ事です
又歩砲一体となり長短相補い 何等苦痛
なく銃斗を終始し得ました事は 今から
考へても愉快となりません
此の銃斗では比較的少數の損害で済みま
した。が 七ヶ丘の戦反諸子には衷心よ
り感謝の意を表して居る次第であります
概略の意を盡しませんので話を終ります
す。

砲身も裂けよと

殺すちまくる

野砲六五砲兵曹長内西佐吉

私達の中隊は密着圏内に位置し警備に任
じて居りましたが、大隊命令により、中

隊長の指揮する一ヶ小隊は、孫家鋪警備第
六中隊ともの警備を交代すべく四月二ト六
日密着圏を出発し、同日晝過ぎ孫家鋪到着
第六中隊と交代して警備に就きました
當時此處は歩兵第四五師隊第二大隊が、孫
家鋪要所に分哨を配置し警備に任じて居り
ました。

中隊は歩兵大隊長の指揮下に入り、第六中
隊よりの中隊として敵状を承知したのであ
ります。が、孫家鋪周辺の敵は突に夥しいも
のでした。

中隊は右敵状を知りや、直ちに陸地構築
除隊設備等戦手準備に一生懸命でした。私
も此の大敵と立戦するには、先づ堅固な陣
地を構築しなくてはならないと思ひました。

四月も終らんとする三十日一八三〇敵砲兵
（砲三門）の活動が活発となり、孫家鋪に對し
砲撃を繰り返しました。不意に砲撃に中隊

も吃驚しましたが、幸にも敵砲兵の観測は不確実なため、陸地前ニ三百米の高空に十数発炸裂しました。情報に依りますと

敵は五月一日のミロロを期して総攻撃を企圖しあるが如く、海軍方面に部隊は本日

午後、徳村張家橋附近に侵入し、その砲

兵は張家橋附近に配置しあるが如し

といふ、その砲に依り孫家舖中隊にある四階

建屋上より、敵砲兵陸地の搜索に専念しま

したが、惜しくも夕刻に至り敵砲兵の射撃

中止となり砲見を棄てました。

情報の如く三十日薄暮に至り、敵は夜襲準備の態勢を執るのであります。小銃機関

銃の猛射も甚だしく、続々孫家舖に接近

して来ました。

當時、警備は歩兵二大隊、野砲一隊、小隊の僅少な兵力の爲、敵を我が陣地前近く引

付け、陣地直前に於て徹底的にやつつけるとの歩兵大隊長級の命令によりまして、大敵が接近してゐるを自覚し乍ら、黙念として夜に入りました。

二、三〇頃、敵の射撃も止み、物寂しき程静かになつた。時折流弾が警報味無く飛

去ります。歩兵大隊長より情報を受けまし

たので、増加衛兵を編成して陣地に就かし

め、夜を徹しました。

中隊は二、三小隊と言つても兵力は僅少で

若し敵の主力が中隊正面に重点を指向せば

如何に苦戦し陣地を守護すべきか、私に自

ら見當りつきませんでした。此の時歩兵三

ヶ分隊を援護としてうけ、百方の味方を得

た如く心強く感じました。

いつもか流弾も途絶へしなく、と更け行く戦場の静かさを却つて物凄さを感じまし

0768

〇三〇〇前 陣地前俄に騒々しくなり 間
もなく三百米前方の墓地より敵重械の物凄
と急射し 續いて豆と短音が如き小銃声
あり 我が陣地上は縦横敵洋銃聲とは此の事
どありませう

敵の垂ろ坐す彈丸 ちんのその 我が死傷
物凄く 天落ち 地も裂けんばかりの大音
響に 敵の攻果も一進一退です

然し敵もさるもの 四圍より攻め寄せたの
で私共僅少の兵力では應じ切れなれどさへ
思ひました

東天白む頃 敵の攻果一層猛烈となり 勇
敵を敵一名が 歩兵大隊本部間近三十米に
走り寄つたと思ふ間もなく 一軒高れに葉
茅屋根に火を放ちました

見ると 程に火は燃へ上り 煙を欺くばか
りです 此れに依つて反つて敵の目標を登
見した我が砲は 二門の口を揃へて零距離

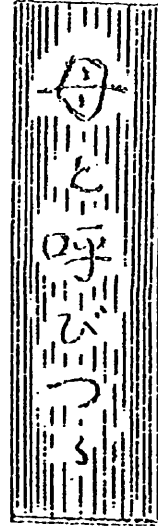
の連続射撃です この時ばかりは死傷も夥
け もう察目かと思ふ程凄まじい

夜は明け陣地前百米位見ると頃 敵は退
却の色濃厚となりました 歩兵は機を失せ
ず果敢に突進に移り 後から架装掛に斬倒
す者 抜刀して追ふ者 銃剣で突くもの
實に壯絶なものでした

〇七〇〇頃 陣地全面に亘り七〇〇米後退
しました 續いて友軍の出雲に敵は次第次
第に迫りまくられ 孫家舖南方三軒の部屋
に逃込み 吐處に敵の五月一日の總出雲は
大失敗でした

暮方又も前部より逆襲を試みましたが
我が勇敵なる反撃には如何とも仕難く 遂
に敗退しました

☆ ☆ ☆



野原の四段 砲臺を嘗 田村曰る

五月十四日 衆懸城の夜は暗雲低く空を覆ひ 風のなき真闇の何となく寂苦しい夜どした 草木も眠る夜半三時頃 突如 間近に銃声を聞いて「すは敵襲」と 跳び起き

手早く衣服を着て 拳銃鉄帽を執りて表に出た

敵襲 敵襲

と叫びつゝ 警急集合を告ぐ 部下が眠つてゐる前の民家の壁に迫垂銃弾が命中し 土砂塗れに慌て小ためいて 着のままで飛び出して来た兵もありました

間もなく武装した兵の集合と共に 本隊の第三大隊設列 第一小隊の宿舎前に行つて 設列長中村少尉殿の指揮に入り 小隊長成松准尉殿の正署をうけました

第一小隊は砲廠 一庭の警備並に應戦に任じ 我が第三分隊は自己の宿舎及庭の警備を命ぜられました 直ちに部下を区署し 配属に就かじめ敵と対戦しました

一寸先は見へぬ暗闇の高 敵の配置判明せず 手探りで地物を利用して城壁の方へ進軍しました 敵は暗闇を利用して 迫垂銃 手探り 小銃にて熾に猛射を浴せす 弾丸は附近に烈しく飛来して実に物凄程であります

軽機関銃手砲兵一等兵満下松夫外三名は 機をみて城壁近く果敢に進軍を試みましたが 不幸満下一等兵は左胸部を貫通されて

倒れました

敵は既に城壁を乗り越越へ城内に進入つたらしく、軽機銃、手榴弾の猛射は益々加り、大隊本部との連絡は遮断され、連絡は杜絶へました

第七、八十各隊協力して應戦しましたが、闇夜と地形不利の爲進退は思ふやうに出来ませんでした

交戦三時間余り、漸く城内の敵を駆逐し、夜明けと共に城外に退却して、敵を善退しました

敵の損害

遺棄死体 城内四 城外三 捕虜三

友軍の損害

戦死三 重傷二 軽傷六 外軍馬七頭

我が部下満下一等兵も戦後三時間にして

母を呼ぶ

オツカン…… オツカン

の悲壯な二語を残して絶命しました。戦後病院に満下の遺骸を迎へに行つて、傷付いた勇士を見舞ひました

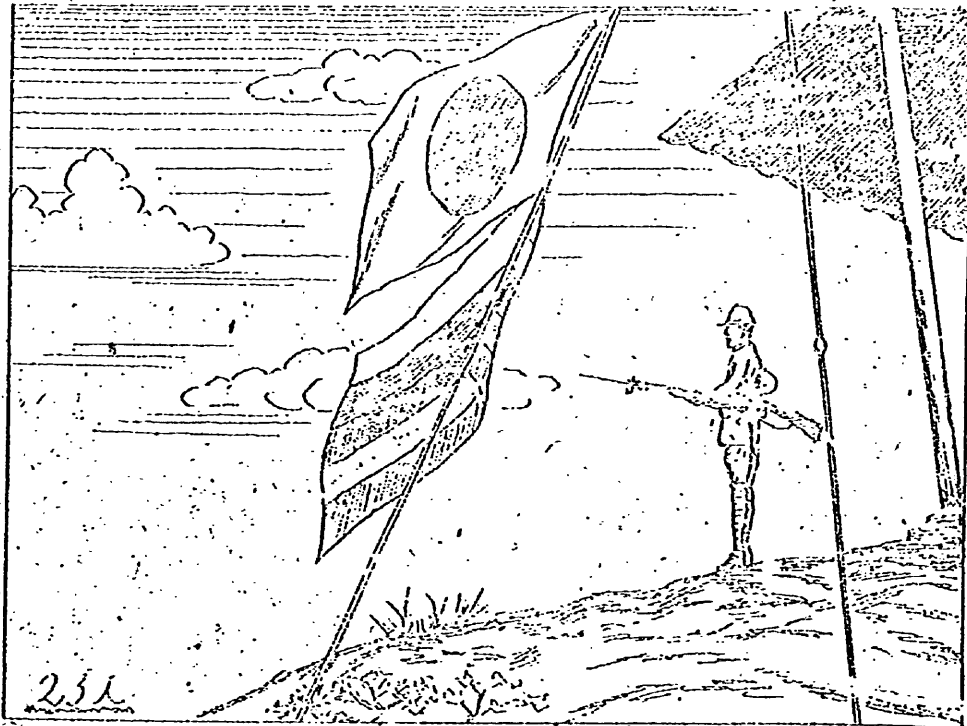
思ふに敵は前日城内の歩兵部隊が出發し、白兵戦に不得手を砲兵のみが残つてゐるのを探知して折柄の暗夜を利用して、兵舎裏にある城壁の下水溝から這入し、城外と連繫

をとり、大隊本部目當に襲撃したもので、らく、捕虜の言に依ると、その夜の敵は城内約三百、城外千余りあつたとの事、出征以來

束始めての急激な夜襲でありました。溝下一等兵とは、其の夜又方振りに給與され、日本酒を酌み交して、共に楽しく談笑

した事を思ふと、その壯烈な戦死は悼しい限りであります

夜は抹香漂、小讀經裡に、一月悲しい通夜をして、英霊を慰めました



燕湖警備と討伐

もくじ

白地に赤く 日の光衆のて 山田辰雄
 下巳前領討伐の 鈴木上等兵
 方村討伐 甲斐藤野
 三山領の討伐 河野 朝
 揚子河討伐 山田辰雄
 敵色回を説く 久木清憲
 雁山討伐 甲斐藤野
 北園軍曹
 甲斐曾長

白地に赤く



歩ニ三三正ノ一

赤兵衛曹 山田辰雄

葛湖で小隊は「育英女学校」と書いた学
校に宿営する事になりました。中に入ると
見ると、とても奇麗な所でした。

此の學校が、我々の本據だ。と皆大喜び
です。

音く此処で暮らしてゐるうちに街の治安も
恢復され、學校も復學の時期にもなると先
生らしい支那人が許可を得て四名だったか
學校と見に来ました。

其の時谷山軍曹が得意な英語で話しかけ
ると、その口却ってどうして相手は流暢な
デクセンとて話も始めたりして、谷山君も解
らなく、何となく、水筒で水を飲んだ
と云う。

此の荒れ道は良く話すと、なんと一歩
つた、と。

大笑した事がありません。

其の頃、日語學校も創設され、以て宿舎附近の
子供も通って来る。學校の生徒は皆腕章を
附けて居ますから、街に出ると良く見受り
ぬきました。

朝早くから

白地に赤く日の丸染めて、とか、

お身々つないで、野道を行けば、と

六つ世様大敵を倒って、友達らも、二三人

連れで元氣良く宿舎附近を覗き乍ら通って

行く

大人も子供の感化を受けてか意味もわからず子供の様に唱ふ、斯うして宣撫されて行くうちに平和は築かれ行く、此の宣撫に従事する人の労苦も又忘れられないもの、一つです。

後でわかつた事ですが、此の厚枚は外人經營だつたので、憲兵立會ひの下に外の家に移轉しました。

停車場の湖の上に家を構へて居るスペイン人も、我々に大変好意を持つて居ました。

散歩に出く門の附近の道路を歩いて居ると、態々頼みもせんのに門を開いて家の中を案内して呉れます。難民も多数收容して居るので、気持は良くありませんが、好意を無にせず見て廻りました。

始終笑顔をして應待してくれました。四十

五六才の背の高い眼鏡をかけた、桃色顔のスペイン人は忘れぬ事が出来ません。

スペインの国旗も此処で頭に強く覚え込ん
で了りました。

チヤン馬に
手を焼く

歩三工ノ小行李

輜重兵 鈴木上等兵

燕湖警備中のことであります。

当時新しく私の相棒になつた、チヤン馬

(支那馬)はどうしても私に懐かぬ、癖が

悪くて仕方がないのです。その朝も手入を

してやろうと曳出せば、もう跳ねたり蹴つ

たりして暴れます。

丹念に手入をしてやろうと云ふのに何ん

ん打つたと、痛みに障って仕方がありません。

この馬鹿野郎と

棒切れで殴りつけると、後退して、網を切つて逃げ出し、しまいました。

「生意気なまねをするか」と追っかける

と、尻を上げ、蹴り乍ら一目散に逃げて行くやつとの事で、去郡人が捕へてくれば、しらので、やれ安心

今日は一つ、性根に、たへるまで、いかにして、退水しよう

暴れる奴を、厩まで引ばつて来まし

「この、高介、石野郎」

「貴様、高平、總武士をなめたな」

「この、野郎」

「歡呼の聲に送られ、貴様等の糞掃除に、聚夫の、じやないぞ、この、野郎」

「さあ、抗目意識を叩きのめしてやるぞ」

「この、糞野郎」

暴れだす、暴れだす、馬は、又々網を振り切つて、逃がく、逃げ込みました

放つて置く訳にも参りません、後を追っかける、如何にも敬意を示した、仕事です

愈々怒り、心頭に発し、追っかけますと、益々、人を馬鹿にしたように、近づくの待って

は逃げ、遠く逃げては待つてゐる、如何にも嘲弄して居る様子が憎くて、耐りませ

ん、殴り殺してもあきらめ、いふ様な、気で追っかけ廻しました

とうとう、くへ、くへ、になつて、坐り込んで、仕舞

ひました、が、ケヤン馬は、蔭も形も判りませ

ん、口惜しい、中にも不安を感じ、割り功、此

ぬ、気持で、とぼくと、帰つて見ますと

ケヤン馬は、すました顔をして、厩に這入つて居るのです

もう、いはず、元氣も、勇氣もありませんでした

情けないや、口惜しいや、か、訳の判らぬ、決が、顔をつたいます

ぬ、決が、顔をつたいます

ぬ、決が、顔をつたいます

ぬ、決が、顔をつたいます

ぬ、決が、顔をつたいます

叩いた跡も気になりませんので 側に寄つて
撫で、ヤリますと 馬も頸をすり寄せて
鼻をならし 目を細めます

何んともなくいじらしくなりましたので 飯
も忘れた手入をしました

この癖の悪いケヤン馬も それからは日増
に馴れて良く働いてくれました

ケヤン馬は無暗に殴つてはいけない 気永

に馴らぬはならんと云ふこの時思ひました
私の脚恥かしい失敗談が何かの御参考にな

れば幸いです

下巴河鎮討伐が

私の初陣

歩三三 RIA

歩兵上等兵 黒木徳雄

昭和十三年一月二十八日 巴水駐方面の
討伐は新に召集になつた私共にとつては初
陣でありました

古兵殿達の手柄話しや実戦談を面白く聞い
て 未だ経験せぬ戦場のことなど、あれこ

れと想像して緊張した一夜を明しました

午前一時起床 二時三十分出発準備が完了
しました

雨はしとくと降り、暗夜の行軍を一層
困難ならしめました

肅々として声なく進む隊伍に伍じて行軍す

れば 初陣の言ひ知れぬ感慨が胸一杯に溢

れる様でした 馴れぬ夜行軍と泥濘の悪路
のため夜明けまで 四回も溝に落ち古兵

殿に

「又落ちたかし」と

笑はれました

道路は敵兵の爲に横に掘り切られて居りま

す 辺りが見える様になるとホットした様
な気がしました。馴れないうちは暗いのが
一番いけません。

時計を見ると早十時です。

戦斗とは唯もうこんな歩き廻るものかと
期待に反した悪気持が致しました。
十五分の小休止の時、古兵殿が、もうぼつ
く、敵とぶつ、かゝるかなあ、と語して居
る。

私共は早く敵が見たくてたまらぬ様な気が
致しました。
出発をして間もなく、前方五六百米附近に
銃声がし出しました。愈々戦斗になつたと
思いました。

パンく、と云ふ銃声は益々激しく、味方
も鏖戦して居る様です。急に全身が引き締
つて来る様に思いました。
(聯隊砲前へ) の連傳が参りました。

私も一着に走りました。

弾が来るから、鉄帽をかぶれ、と

分隊長殿に注意され、慌て、鉄帽を冠り
ました。

小松原に砲は陣地進入です、私は夢中で弾
薬二発をかっいで、砲側に蹲ぶ様にして運
びました。

敵陣に炸裂する砲の威力をこの時始めて見
て、心強く感じました。

我に抗し兼ねた敵は間もなく退却です。

それ射て、新しい兵にも射たせろ、と

赤星小隊長殿の命で、私も突弾を此の時三
発射たせて貰いました。

敵数人を一人でやつ、けた様を実に痛快な
溜飲の下ろ思ひが致しました。

田 田 田
方村討伐

突襲の豪華版

田 田 田

歩二三工ノ二

歩兵軍曹 甲斐藤四郎

昭和十三年二月十六日 蕪湖東南方八里

方村の討伐の時であります

駒沢大隊はクリークを挟んで北方より南下

して、方村攻襲に決しました

第二中隊第二小隊は湯腸小隊(所)を

同クリーク西岸より、主力は東岸第二中隊

(子冬)を尖兵として清水河と云ふ処を、午

前六時方村に向ひ出發致しました

第三小隊が尖兵で第一小隊は其の後方を前

進して居りましたが、八時十五分敵歩哨の

射撃を受け、直ちに尖兵は之に攻襲を聞

始致しました

残念にもクリーク堤防工以外は湿地、又は

水溜りでも通過が出来ませんので、尖兵たる

第三小隊、ケ小隊だけ、漸く展開出来る程

度なので、第一線に出る事は出来ませんで

した

尖兵小隊(三小隊)はすぐに敵警戒陣地を突

破して、敵陣深く敵を襲破しつゝ、方村北方

約八軒の惣名部落迄進出致しました

自分達は第一線に出るのは、未だかくと

待つて居た時、當時指揮班長代理、長田軍

曹が自分の所に上んで来た

「第一小隊は三小隊と交代、第一小隊第一

線」と云は出て

小隊全員喜んで勇んで、第一線を三小隊と交

代致しました

其処で晝食をなし、敵情地形を搜索し終つ

て、午後二時愈々攻襲を開始致しました

先も述べました長様の堤防上のサーカス通過出
来ませんので、射隊砲、機関銃の掩護射撃
の下に、戦斗分隊を一ヶ分隊ずつ交互に前
進せしめ、某地最近進出致しました時
正面約百米の部落より、敵はチエツコ又は
部落前迄棄り出して來て、立射を、
小隊にも我ら應戦しました
小隊は突襲準備を完了し、堤防面側より之
に向ひ突襲し、之に余祐を介へず
何葉ッ、そんな弾があたりか、とはか
り、喊声と共に一拳に突入致しました
友軍の果敢なる突襲に依り敵は狼狽しく
ウロウロしてひまます
「ソレ、斬れッ、ソレ突け」と
忽ち十數名を殺し、敵の先端に衆出すや
敵は堤防上を算を乱してワイウイ、と退却中
でした、小隊は
「芝山逃すな、と、追ひかけて僅か十米

に迫りました
「行り、ウイ」と
堤防上を二直進、我先にと之を急迫する各
分隊長、中にも当時第一分隊長、甲斐伍長
は足の早い男で
「何、ウナ」と、追ひ付きざまに突殺す
次の者は遅れじと又前つを突く、追越して
は斬る、敵と入乱れ、乱斗しつゝ、次の部
落に突入しました、敵は余りの急迫に抵抗
する事も出来ませんでした
續いて次々と部落に突入して行きました
逃げ行く敵は次から次と、五十、百、二百
と増し、芝山を
「芝山行り」と、突いて行く
一人ひと突きつゝ、しか暇がない、といめ
は後の者に譲って行く
續いて次の部落に突入した時は、敗走する
敵は早や五百

それ逃すな」とはも追乗

と遠くバクリークの堤防より左の方に別

れて出てぬき堤防が眼にわく

あれに敵がとりついて抵抗したら 僅か一

ヶ小隊の兵力 地形は悪しどうにもならな

い 息は切れども あゝの堤防迄は追乗せぬ

ばならない 距離は約千米位だ

退却する敵の先頭も来だ 其処には取付

てぬはい……好し……

各分隊競争向ふの堤防迄突進に進め

分隊長は他の分隊に負けるな行けーとす

相討追込にも援軍は息はきれぬーと敵

の死体を蹴り越えろ事も容易でなく死体に

引越つて倒れる者もありましたが今の号令

俄然頑張りました

軽機の射撃手ふんが足がもう上らぬと

度り分隊長が持つて走り 射撃手は水はつかんと

分隊長より取りかき走って行く 川隊も残さぬ

列陣面バラバラの足音……

敵ももうフック／＼とバカもついで倒れる状

も居る 水も引懸つて 友軍も倒れる者がある

敵と高に重々倒れ余り 疲れて居る為 一と突

に殺す気ももう起らない 敵もアツケにとられ

てボツとして居る有様です

漸く先付て敵を突撃す 突かれて敵の野郎ツ

ノムとききさきり すぐ敵を水にの急進です

寸時にい 其の堤防上に進歩 逃るく敵の多

い事 一ノイ軽機早く来た 萬弾筒早まら

堤防の向小側にも敵が何名も疲れて息が切れ

れて居る 其処より三方に逃げた人です

軽機到着 何と云う 早射に人か」と言へば射

手は疲れて居る射つ気力がありません

橋にやれ 何ややらん」と奪奪の合つ

正面退却中の敵も撃つ 五〇米前附近より

將校倒れ居る人です 何やら／＼折り返りつ

驚かすのが胸のスク思ひでした

トテ格下にも射にせよ。同様にシテ其れ
 と交るぐ、射をまくりにした
 掃弾筒の熱の退却此の前方を射ります
 敵も恐りませ人、弾、銃、砲ど滅滅とした
 提防の向小倒に倒れて居た敵も漸く死付い
 て起さず。それを出て行はれは斬る突く敵は
 もう抵抗する意思もありません
 其処で小隊は態勢を整へて攻塵を開始致
 した。敵の死傷の多し事、多し人々に
 死んだものと怒りませした。多し人等は一語に
 二百余も重なり合つて遊気して居る処ありませ
 前方には方村の部落が見えます。僅かに五
 〇米だ、それ行け、突込め!!と
 一六〇〇部落の一端を占領し、その時許
 リ日腹の底から、るを三唱致せしめた
 神の御加護。小隊は一名の犠牲者も
 ありません。斯人は痛恨を戦斗
 後も前にもそうガラにありません

三山鎮の戦い

敵弾下

小隊長を以て

歩三三本部

歩兵七等兵

河野明

南京で出征第一目の正月、送り、蒸湖に
 来ました。私等は西梁山遊軍一ヶ月、西の麓
 湖に歸り、林叢を回、五日して三山鎮討伐に参加
 しました。
 昭和三年二月四日、私等天隊の七中隊は緑日
 鎮で晝食を終り、柳林を違つた道路を前進す
 る事三〇〇米、早も敵のチェック小銃弾は固断
 なく進歩します。
 ウム来たふれと過ぐる幾度の戦いで鐵へら
 小隊私等は面白半分で前進しました。
 其日は無名部落に落付きました。部落名
 名のみ、横暴な支那軍のために或は焼け、或は破

此所で揚子江を軍艦の護衛に依り進軍して

來る大隊主カの上陸を待 して居ました 夜に
入て寢るは一入身に沈み 敵の音聲は暗夜の
静けさを破つて、きかんに蒸気味な音を立ち、夜
んで來ます

令隊長より立哨外の者は早く休め 明日は銃
攻進だがらと注意の山一同 葛原の中にもぐり
込みました

明けは二五日 早とも全員起床して攻進命令を
待ちました 東雲新く白く頃、前進命令は
下りました

我々の銃砲は附近の山河を震動させ

私の小隊は道路の右側を揚子江に面して攻進

前進する事、一コロ米 鉄條網が三重も張り

廻らされて 道路の中央には、チエック掩蓋座に

照火するチエック銃が、皆山に一射と構へて居ます

小原英小隊長殿の命令で、私は河野とふ川

世の軍兵と鉄條網を北岸から下して鉄條
網に迫りました

後方からは目上令隊長以下我々等がチエック銃
眼に向いて掩護して居られます

揚子江岸から這入て来る弾丸は足下で土煙を立ち
ます 出征以來 鉄條網を切らうは初めて、只だ
気が急ぐばかりで銃が切水ません

「落ち付けろ」と自分で自分を制して、新人
の通れる位、切り取り第二第三の鉄條網も切り取り
ました 彼我入り乱れて手榴弾が後方から飛来して敵

陣に突入する事が出来ましたが、敵もさる敵十七
八の少年兵が、やにはに背負刀を振りかざして
這い出して來たのには、意外な驚きを感じました

少領と見えますと九人の死体と多数の首級が、
放棄してありました

その時、二、三向右を急いで後を見ま

すと隊友が全員山の標に敵弾下に集結して居
ます 何事かと走り寄つて見ますと、親とも腹を

小隊長殿が足を負傷し小て座りて居ら小ます
 戦友等が集結は第三陣と成りてこの遠敵を
 す 身と以て小隊長殿を守り人垣です

此の状景を見ました時 生死の境に此の美しさ
 迄には目頭が熱くなるのをどうする事も出来ません
 此小隊長大和男子は日本軍は強いのだと感激し
 つゝ一種の奇情を味はつた事よりあります

漢口攻めの序幕 黄梅方面の戦斗は名
 譽の戦死と遂げられ精目の神とよまれた小
 原小隊長殿を思ひ
 一人と感慨息を覚ふるものがあります

歩三三ノ一 北園軍曹

言ひ置かむ

歩三三ノ一 小隊長

西洲を水に作りし心
 小

楊村附近討伐

敵

歩三三ノ一

歩兵軍曹 山田 辰雄

駒沢少佐殿を長として大隊が燕湖東方三
 里余りの楊村附近を討伐した時の事です

大隊は寒の朝 早より行動を起しつた小
 隊を主力と共に行動して居ると河の向小と右翼
 隊として攻取中の二甲隊の一々小隊が昔殿とい小
 傳令の報告あり 河中也百歩以上深きは深
 ず舟でなくは到底渡河する事は困難不
 両岸には大きな堤が有つて 道路と防水の両方
 の役目をして居ます 之に接して抵抗する

敵は川瀬にし我々目掛けて乱射をす

距離も近き事だに堤防のう一寸顔を出して見ると
苦戦の様がよく判ります

響くすゝと増援命令が来ましたに、ヨシ行くぞと
と見れば、皆張り加つて居ります、小隊は三々

分隊で川隊長は勇敢なる清水軍曹殿であり
ます、砲台も水へ来て工兵の舟に乗って猛射

を受けつゝも魚事、対岸に着きました

こちらに前進して右翼隊の陣取つて居る線に
出ました、見れば隊長以下皆勇敢に戦つて

居る、増援を得た同隊も意気天を衝く
有様です、その主カが同線に出たり、我々も

標之艦を喰らせて居るのやした

情状を聞きますに、一、米前の敵の奴はナ
エウ、格闘、自動小銃を持つに幾倍も敵

湖跡はならぬと言つて、中にも負傷者は続出して
ます、然し負傷者も仲々剛氣者許り、い、備

帯をば又前の位置に前進して狙撃する我々

右翼隊の左の河端の線に陣地を占領しました

敵はまたそれを知らぬので、加へて一、突陣地には来ませ
ん、これは幸と主カ方面に、注意して、見える

敵を狙撃しました、射たがても音々の位置を
見付けぬ始末、然し乍ら主カの方ほど人々

増援して居ます、こりやいかにといふので側射
を始めました、落着きの狙撃で射撃は一突一

敵に多大の損害を与へます

正面と側面よりする射撃の爲に敵も堪りない退
却を始めました、旗を見て取つた主カは日の丸先頭

に突進を始め、一隊二隊と見ると向に本陣を陥れ
ました

退すは其の下、洋の口、この境の中を逃
らふく音々も引張り出して、血煙を上げる、縦隊

にホつて敷走りの敵には、軽・重機の掃射です
見よう、中にバク、倒れて仕舞ひに迷ひたりは

一人、三人の少數で、全く奇状の限りです
これを見て、敵は音々正面に敵も、勇猛の姿を見せ

始めました

其際様かの徳兵衛のみ残して小隊は前進して居

宮助の所迄追討す。又、この時一歩槍弾筒で撃は

いて其の様に衆を突退せました

「ウー」と突込むと、多量の米俵が前面を逃げる逃げ

る。それと言小の勢で人々で追ふ事至。米許にする

と正面の壕から又してもチエツコウ猛射です

敵の重板に堤の左側を殺せ。吾等は右側に出

ました。直ぐ前に自働小銃を構へて待つて居る一層

堤の周りに居ます。おれ島中前に敵が居るぞ」と言

へば島中は軽機をかけた。其奴目かけて引鉄を

引きました

みるとその後方に多量の敵が我々を狙撃して居

ます。右と前進したに中隊は平地地を我々と同

様に進出しましたもの、如何せん、急ぎの居る

堤の下より、敵の様は長り中二の米位深さの短水め

ワリクがあり、それ引か、つて仕舞舞つたのです

弾丸は急ぎの通り、雨の既、多引動きの出来ませぬ

漸く壁に身を這い登り居る位です

私達の方に來ようにも來水ません。其時、

悪人です。多量の敵、前を受撃します

私達も強力が無い為、補給を待つて居ると通信

する人ですが、此、此散の混つた北風は、陽が西に

斜むに随つて一層、殺しくなるばかり、こりや

夜になると大変なと補充する、事なく突退する

事にして中隊に連絡すると、今迄、遠慮して居た

中隊も、まぐろと頭を上げて射撃します。それ

引きつられて敵は、水に向いた

ソレ今だ」とウワツと大きあげて突退しま

した。逃げる、真黒です。斬ったり突いたり

取つたりの大格闘で、追込には背撃は要り人と

即ち殺す、一、百水退りました

堤の上には何人も引くり逃つて居る。將夜も

二、三名死んで居ます

刀の試み斬りも此の際だと腰に差して居るの

抜いた手に銃剣、右手に刀と逃げかけては突き

蹴上はしては切らぬを厭まぬ敵はもう抵抗すも乳かき
ぶくうろくする許りせず

蕪野島守で何もかも判りませんでした 右で退軍
の手を休め引退しますと戦友が、今隊長殿は

大變だどらうござんかと言ふので自體を見えと
金くの血まみれなのぞす、それは逆り血を全身に浴
びて居るのでした

戦争の後に來る あつノビノ、とされた 味はつた
者のおの知る女らが、に浸りまゝに

此の日の突撃は突に危かつた 何十名かの生命を
無事上救ひ出したのであります 後から二甲隊の兵か
ら泣いたと言はれ水にものぞす

残念な事にはこの日の戦斗で二甲隊の小隊長殿
は戦死をされたのであります、若くして御冥福を
祈りまゝに

激戦の後の夜の静寂 空には一点の雲もなく星
の銀世界 遠く近々に大の嘯声、敵敵の銃声

も他しく戰場には數敵の死体が黒く横た

はけて居ます

討伐は敵に熾烈的打撃を与へて有利に
終局を告げました

一寸した気転

敵の包圍を脱出

歩三三ニ歩兵軍曹 久木山 清憲

蕪湖の戦場は愉快小面自い謝らば想出と
共に隨分苦しい討伐の思ひであります

その中でも私として忘れ難い出来事なのは楊
村附近の討伐の思ひ出であります

元水は十三年の春まだ浅く三月の十四日でありま
した 江南の野にも早春は訪れ名も知らぬ草花

は赤く白く、空に咲きそめて、兵隊の目と心を集
ませせし具材ました

愈々楊村に歸着する敵を掃蕩する為出勤
と決した前日、私は異名と共に片腕を命で

ら水濱情地の似似茶の爲に、
事になりました。

大座の夕日を背に受り、五名の首領は、
渾下から立本に遠藤の、
致しました。

任務は重く、
申す一歩一歩にも万全の注意を、
く前進したります。

此らに、
遠く、
到着、
況がいたります。

命を、
六、
手、
た、
過、

たし、
時、

何、
は、
右、
河、
り、

一、
先、
弾、
敵、
こ、
ん、
け、

斯、
の、
壁、
一、

此の時とは或る着想を曙光の如く感じました

—— 予の成るが成らぬかは天にありませぬ ——

兵隊に裏に延ばした私は家の屋根にはひよりま

した。何つた目の丸を竹にく、リッリ、右に左に大

きく／＼振りまわした

対岸の友軍に連絡する趣向有人ですが勿論

対岸に友軍が居る事はよりませぬ

敵にそうした感じを身入たのか山です

敵方に見える様にわざと装束も／＼振りまわ

とこの計略の助けが團に当りました

段々接近して来た敵がピタリと止り遂に一

人逃中二人逃りして銃ももまほらに銃がなくなりました

有難い孝太郎一同五名脱走の如く家を飛び

出れ舟に飛び乗り対岸に潜り逃げました

たが敵は追いかけて射たうともしませんでした

一歩した様子を脱した我々も竹筒兵に脱走

任務を終へ此の報告をすする事が出果ました

鹿山新前道の討伐
江無嶺跡 龍の渡河戦
三三三三 若松會 甲斐藤田郎

昭和三十二年五月二十五日 鹿山南方約二〇行
入路の攻取が済みます

當時第百隊隊長長田信野中尉は 性
質の温順な然し責任観念旺盛といふ模範
的で部下で兵士の倍望も極めて厚く 豪快な
る一人物でした

〇五三〇 中隊の第百隊は第百三隊が大路鋪に
攻取を固守しますや 同隊は指揮班の若干名
を遣わして捕虜に乗り 敵のを翌日に向い進出し
第百三隊に先立ち大路鋪に突入敵の後ろを
りぞき突きました

敵は我軍の前進に狼狽取りもかも取り
あがり前線方に敗退します 機を失った之を
急進取しましたが中絶せり米がケリリか

ありまして渡河出来ません

敵は舟により対岸に逃げて行き、追ひんとすれど残りの舟は多く河は深く渡渉出来ません

その内敵は対岸の堤防の陣地につき頑強に我に抵抗を繰りまわした。甲隊はカリークの線進來者として渡河を工夫して居りました。舟は互敵方に泳いで行き舟を介挿して来るより途があまりませんでした

其時長田軍曹は「長田が舟を挿りに行くに來ます」と素裸になります。中隊長殿は「いゝが大丈夫か」と聞かると「大丈夫です」と張切つて居ります。よし行けとの命令にて軍刀只一つの背甲に擔つて敵前への米のクリクに衣込みます

敵は水米に討つて是處より乱射を繰り返す。其れ長田軍曹を殺す事と見ゆ。父器を動員して正面堤防に増加してより敵に對し後援射兵を行はせしむ

長田軍曹は一と惡命敵岸めがけて投子

を投げて津に居ます。敵弾は軍曹の胸を穿ち、敵は右に倒れ、上を降り、いゝで居る

戦友の死の祈りの裡に敵岸三つ先の所迄近づくと敵は塚を傳つて既に堤防の先端迄乗り出して來ました。もう駄目だこうなるとは水中をめぐって行つて舟にたどりつき、遠く敵に敵陣に躍り込め斬り死す外はないと敵岸の舟造とリツキ背甲の軍刀に手を交つて見れば

南無三の軍刀は鞘の内で刀身が折れて居る。また軍刀が折れれば駄目だ舟を泳いで引く川共舟はレつかと敵岸にくりつてある處何ういふも動かせません。今この水迄と残念ながらも舟を引いて引き逃し、いゝもぐつては浮び、さう人に軍刀挿して居ります

添は水余もありません。体の救水と共に息もきかぬ。水底にもぐり居る事も出来ません。敵弾は胸を穿ち、いゝで居ります。漸く堤防の処にたどり着く上にあつて軍曹の鞘の水を落し、悠々

と帰つて来られた。其の時自身も疲れ果たつたが、ものも言はずにグダグダ河原に伏せた。休むとした。路を歩いて元へ帰り、残念だ、失敗だつた、口惜しい、せめて置かれたくも取りに行くところ……見れば軍力の鞘の止草の如く敵陣により折れて居るものも知りませんでした。

重城保護を頼むとき直へは、中隊隊長も、勇士の総に導いて来いと初まき水、又も、背り、弾の中をクリクに、他は、込玉のてした。

敵の集り穴は前以上です。遂に重城も敵陣により破壊され、小は、射れました。

普習として、クリクから上つて来に彼は、見れば、随分、跡したけれど、剣らんと平気の顔です。お中程の聲が、よこしま、お当り人、ちや、と、不思議、お水が、底の軍力、自分代りになつた、に、残念、いや、か、止むと、得ん、と、詰り、も、察、か、した。

憎ら、れ、は、敵、より、ます、が、第一、今、哨、高地、より、する、最、隊、屍、の、拖、曳、に、討、岸、部、落、の、敵、及、び、堤、防、の、敵、は、

一たまりもなく潰走しました。中隊は攻勢を止め、渡河を断念して、二、三、指、合、に、停、退、致、し、ました。が、あの時の長田軍曹の、現、災、予、武、者、振、り、は、今、だ、に、目、に、は、ら、い、て、居、ま、す。

。川、さ、と、け、。

歩、三、三、一、丁、丁、丁、丁、

北、園、軍、曹

い、く、さ、と、け

遠、く、香、け、

秋、風、の

夢、の、彼、方、に、想、ふ、を、り

若くは春風

山歌は腕の甲より入る

流石の弾で死人は多し

血なまぐさき戦場に

行く手々、逆山春風

縁のくにに寄る

涙を流すも軒も雨

今は仇やあまのけし

哀小や老の憎あよう



十五の夢も面ぐつ水

印髪おに色あせて

夜田に打たれ水瘦き指

肩細きと後ぐし

手許の内袋の品々を

土蔵のまたへ教念ト

送り届けてさようなら

日置小の空を

振り急



日本と美即と手ごと水

若と僕とは兄妹に

永久の樂おを築きまじり

明るく微笑み日も

あられ

紅練衣の門口に

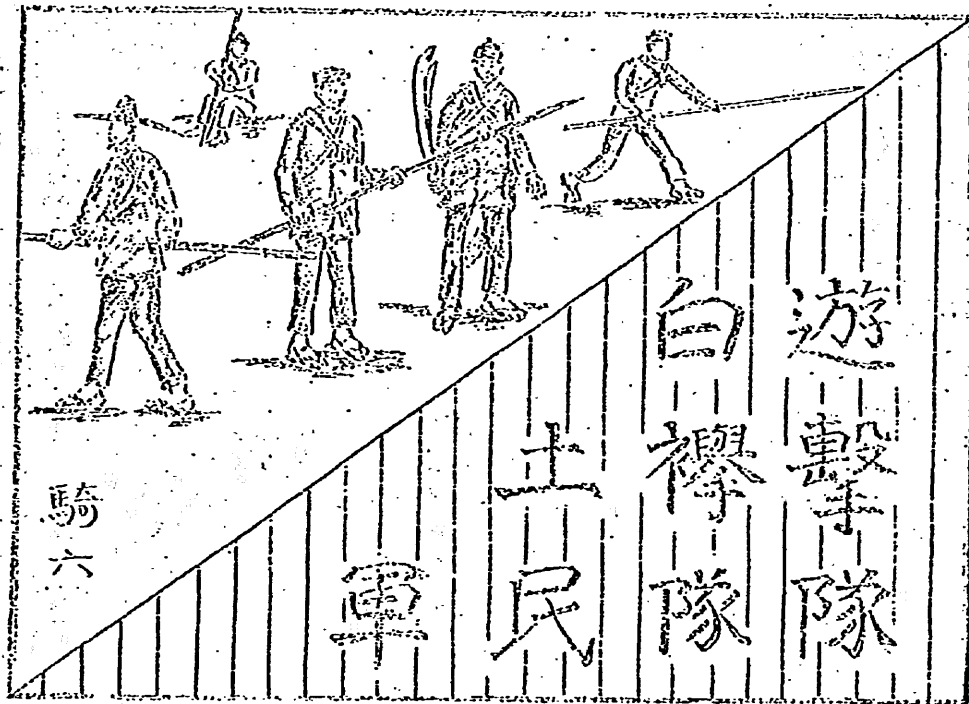
朝小を唄へま自願

流る春風 赤伴の

平也も追春もを

歩三九

甲斐久曹長



- もくじ
- 一 愛馬心に欠けて居た 騎六 自介を恥ぢつゝ 輜 高橋治一郎
 - 二 始めて遊撃隊 騎六ニ 土民軍と戦ふ 騎六尉 津曲 春吉
 - 三 愛馬と共に 騎六ニ 泥濘の討匪行 騎上 地藏堂 武義
 - 四 一夜中寒さにかかる 騎六ニ 騎上 伊知地 末憲
 - 五 見事一杯食はず 騎六ニ 騎一 西村 正雄
 - 六 運漕鎮の敵襲 即國通信 歩上 坂本 幸
 - 七 運漕鎮回顧 師團通信 歩上 福永 順喜